
君が居た日々

紗羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が居た日々

【Nコード】

N9874A

【作者名】

紗羅

【あらすじ】

愛する恋人を失ってしまった、主人公、鈴。死んでしまった、恋人の弟に惹かれて行って——！？

【雨が降り注ぐ日】

君が居た日々は、永遠を感じることが出来た時。
太陽の様に、明るく笑う君が……大好きだった。

君と居れば居るほど、永遠を感じることが出来た。私は此処に居ていいんだと、感じる事が出来た。

——でも……救われて居たのは、私だけだったんだね。

「過去は永遠だよ」

賢そうに黒ぶちの眼鏡を中指で押し上げながら、君に似た彼は冷たく言い放つ。

私は、項垂れながら黙って窓を見つめる。

「いい加減に、周りを見るよ。……あの日のまま、止まっているのはお前だけだぞ」

彼はそう言っ、黙って私を見つめていた。

「そんな事、言わないで。……潤に似た、顔で……忘れるなんて言わないでよ！」

私はそう叫んでしまっ、ハツとした。梁の顔が、少し曇ったのが分かったから。

「ごめん」

俯いて、私は呟くように謝った私を見て、梁は「別に良いよ」と言って立ち上がり、窓を開けながら溜息を付く。

「忘れるなんて、言ってない。でも……そのまま止まっ、ても、何も始まらないって言ってるだけ」

——そんな事、分かつてる。……でも、納得出来ないんだ。

どうして、潤は私に何の相談もなしに自殺してしまったんだろう？

あの時の私達は、何でも分かり合えていた。……はずだった。

君が居なくなった現在を、私は生きていきます。

——冷たい涙を、頬に伝わせながら。

冷たい雨が、窓ガラスを濡らす。湿った空気に包まれている部屋に入り、私はいつものソファに座る。

窓の外は、ザーザーと我が物顔で容赦なく降り続いている雨。面倒臭そうに傘を差して、早足で歩いている人が目に映った。

大学は休みだから……今日は、のんびりと過ごすことが出来る。

『今日は、恵みの雨の日だな』

潤がもしこの世に生きていたら、そう言って笑っているだろうな、と考える。

水蒸気の固まりに過ぎない雨を、潤は『恵みの雨』と言って愛していた。

まだ、潤の温もりが残っている部屋を見回して……私は溜息を付く。

——どうして、潤は……死んでしまったの？

みんなは、潤が死んでしまったことを受け止めて現在を生きているというのに。

突然、電話が鳴った。

「はい」

『あー、俺。今、家に向かっているから』

それだけを言って、電話が切れた。しばらくすると、チャイムが鳴った。

ドアを開けると、びしょ濡れの梁が入ってきた。

梁は潤の一つ下の弟で、潤に似た顔立ちの十九の少年だ。

「何で、そんなに濡れてるの？」

玄関でコンビニのビニール袋を手提げで、彼は呟く。

「お天気のお姉さん、雨降らないって言った」

それだけを言って、タオルを取りに浴室へ彼は向かった。

「タオルと、風呂……借りた」

それだけを言って、自分の家の様に寛いでいる彼を見る。

「何しに来たの？」

「——ああ！ そう」

コンビニ袋をあさりだして、彼は「土産」と呟いてまた……寝転ぶ。

「何がしたいの？」

「別に」

テレビをみて、寛いでいる彼の頭をリモコンでコツンと叩く。

「眼鏡じゃなくなっただね」

「——眼鏡じゃない方が、兄貴に似てるだろ？」

潤の話題を出された瞬間、私は全身が凍りつくのが分かった。

「どうして、潤に似てるって言うの？ どうして、似ようとするの？」

涙腺が緩んでくるのが、分かった。

「好きだから。鈴が好きだから」

——そんなことを言わないで。……お願いだから。

私は、梁と目をあわさないようにテレビに目をやったまま……冷静を装う。

「愛してる。兄貴よりも、絶対に幸せにするから」

彼は私を抱きしめる。私を抱きしめている、手は少し震えていた。

——潤に似た声で、潤に似た顔で……そんな事、言わないで。

「重ねてみない自信が無い」

梁の腕を振り払う力は、私には残っていない。……私は、酷いことを言う。

「……………それでも、いいよ。最後に、俺のことを見てくれれば。」

……………今、コンタクトじゃない。眼鏡だったけど、落としたら割れたから、視界が悪い」

彼の腕から伝わる、温もりが……………私の涙腺を緩ませていく。

「俺が、お前を支えるから」

愛する恋人を失って、二年……………。私は、新しい恋をしてもいいのでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9874a/>

君が居た日々

2010年11月12日11時22分発行